

レンズを通して

連載

十月

写真・文 高円宮妃久子殿下



シロカツオドリ

93cm カツオドリ科

北米から欧州、地中海にかけて広く生息する。海を見下ろす崖や岩がむき出しの島で営巣する。凄腕のダイバーであり、空中から高速で海に飛び込み魚を捕らえる。

海鳥

写真文 高田宮妃久子

8月号ではアイルランドで撮った鳥の写真のうち、ニシツノメドリだけを紹介いたしました。今回はその時に撮影したほかの鳥の写真を何枚かご覧いただきながら「海鳥」について書かせていただきます。

地球の表面積の7割以上は海であり、世界に生息する1万種以上の鳥のうち約330種が海鳥です。海鳥はほとんどの時間を海で過ごし、陸に戻ってくるのは繁殖の時のみ。コロニーで営巣する種が多いためか、私たちは数が多い印象を持っていますが、海鳥は世界的に最も絶滅が危惧される鳥類のグループです。何と3分の1の種において絶滅が危惧されており、早急な保全対策が求められています。

数の減少の原因として、ネズミなどの外来生物による捕食や海洋汚染、繁殖地の破壊、狩猟などが挙げられますが、最大の脅威は漁業による混獲です。混獲とは、漁業において対象とする魚種以外の種と一緒に捕獲されてしまうことを意味し、鳥も含まれます。混獲で命を落とすほど無駄なことはありません。毎年、はえ縄漁の釣り針にかかったり、刺し網に絡まったりすることで、莫大な数の海鳥が命を落としていきます。日本の漁業者によって考案されたトリポールと呼ばれる鳥よけは、混獲を防ぐ効果が高いことで知られており、世界で最も普及している混獲回避装置のひとつです。

刺し網漁は、水中に仕掛けた網の壁で魚を捕らえます。特に錨などで固定しないものは流し網と呼ばれます。この漁



アジサシ 35・5cm カモメ科

北米からユーラシア大陸にかけて広い範囲で繁殖し、冬はオーストラリアや南米、アフリカなどで越冬する。日本では春と秋に旅鳥として海岸や河口で多数見られる。時にホバリングしながら魚を探しては、ダイビングして捕らえる。



ベニアジサシ 35cm カモメ科

アジアや北中米、欧州、アフリカなど各地にまばらに生息する。日本には夏鳥として渡来し、南西諸島で繁殖する。写真の2羽は縄張り争い中。関係者しか上陸できないこの鳥では約1200のペアがあり、ヨーロッパで最多。

まずはプラスチックゴミ。世界的な動きがありますので、流行に乗り遅れないように、いや、ファッショリーダーとなるように、皆で努力してまいります。

ではウミガラス類やウミスズメ類などの、主に小型の潜水性海鳥が採餌をしている潜水中に漁網に絡まり、溺れ死んでしまうのです。最新の研究報告によると、毎年40万羽の海鳥が刺し網漁で混獲されているそうです。漁師さんへの働きかけや企業に対しての啓蒙活動はNPO団体もできますが、新しい手段や政策に基づいた取り組みは産官学の連携が必要でしょう。海鳥の誤食問題も深刻です。世界の海洋プラスチック廃棄物の9割は、わずか10ほどの河川から海に流れ込んでおり、その量は年間800万トン。海のゴミの70%です。現在、海鳥の90%がプラスチックゴミを誤飲しているということがわかりました。プラスチックそのものに有害な物質が添加されていることもあり、魚や貝、海鳥の体内から、プラスチック、そして溶け出したと思われる有害物質が見つかっています。

混獲と違って、海洋プラスチックゴミは私たちが関わることでできる身近な問題です。世界の海はつながっており、安易に捨てられたプラスチックゴミは海流に乗って世界中へ広がっていきます。海は生命の源であり、世界中の多くの言語で海を「母」にたとえるわりに、著しく礼を失する行為を繰り返しているように思えてなりません。母親が我慢の限界に達する、または蓄積した疲労で病に倒れるのと同様に、浄化するのが難しい有害物質や自然に戻せないゴミを繰り返して海に捨ててきた結果、海が悲鳴を上げているのが現状です。

海鳥の減少は、広い海で起こっていることを私たちに教えてくれています。「知らぬが仏」と申しますが、知らなくて仏様のようにするのはなく、大いに知っていたら、心を痛めていただきたい問題です。海は地球の健康のバロメーターであり、私たちの生活に影響します。海洋国日本に住む私たち一人ひとりが、もつと海を意識して生活するべきです。

ウミガラス 43cm ウミスズメ科

ウミスズメ類の中では大きめの種で、北太平洋から北大西洋、北極海にかけて広く分布する。世界では珍しくないが、日本では天売島(てうりとう)にのみわずか数十羽が生息。右中央の親が海から戻ってきて、口を開けてヒナに餌をやるところ。